

| | | | |
|---------|---|------|--------|
| 氏名 | ： 坂田 桂一 | | |
| 専攻分野の名称 | ： 博士（教育学） | | |
| 学位記番号 | ： 博甲第 256 号 | | |
| 学位授与年月日 | ： 平成 27 年 3 月 17 日 | | |
| 学位授与の要件 | ： 学位規則第 4 条第 1 項該当 課程博士 | | |
| 学位論文名 | ： 中学校技術科教育における技能に関する教育目標の内容とその意図 — 直江貞夫の教育実践を事例として — | | |
| 論文審査委員 | （主査） | 准教授 | 木下 龍 |
| | （副査） | 教授 | 橋本 創一 |
| | | 教授 | 伏見 陽児 |
| | | 教授 | 山野 芳昭 |
| | | 名誉教授 | 大河内 信夫 |
| | | 教授 | 横尾 恒隆 |
| | | | （千葉大学） |

学位論文要旨

1. 研究の目的と背景

本研究は、中学校技術科教育における技能に関する教育目標の内容とその意図である教育目的を、直江貞夫の教育実践の分析を通して明らかにすることを目的とする。

これまで技術科教育では教えるべき内容、すなわち教育目標として技術学的認識と技能を措定してきた。しかし、技能については技術科の発足当時から否定的、副次的にみる主張がなされた一方で、その重要性も主張されるなど、その位置づけが論争的に扱われてきた。そうした技能を巡る議論を経て、技術科教育においては、いかなる技能をなぜ教えるのかといった技能に関する教育目標と教育目的の具体的検討が課題として提起されてきた。

しかし、技術科における技能に関する先行研究は、その教育目標を教育目的とともに検討するという視座が不足してきた。教育目標はそれを設定した教師が日々の実践の中で形成してきた教育目的のあり様によってその質が左右される。本研究は、そうした教育目標に対する教育目的の基底性を視野に入れることで、教育目標の内容をよりの確にとらえることを試みる。

上記の課題に対し、本研究は直江貞夫が展開した教育実践をもとに検討する。直江は技術科の授業の中で技能の到達基準を明示し、生徒の技能習得を成功裡に導いてきた。さらにはその授業を数多くの実践記録や研究としてまとめてきた。こうした特徴をもつ直江実践をもとに技能に関する教育目標の問題を検討することによって、教育実践という教育の事実から、教育目標としての技能の技術教育学的意義を具体的にさぐることができると考えられる。

2. 研究の方法と論文の構成

本研究は、直江による研究や実践記録等の記述類、インタビューの結果および筆者が直接調査した授業記録を資料として、次の 4 段階で研究をすすめる。第 1 に、直江実践の形成過程をライフストーリー（個人史）として明らかにする。第 2 に、直江実践の技能教授に関する教育目的を直江による語りの文脈に沿って明らかにする。第 3 に、直江実践における技能教授の教育目標の内容を、その「技能の到達基準」「教授内容」に注目しつつ明らかにする。第 4 に、上記の方法で明らかにした直江実践の形成過程、教育目的、教育目標の関係を総合的に考察し、直江実践にお

ける技能教授の教育目標の内容とその教育的な意図である教育目的との間にある関連構造を明らかにする。上記の研究方法にそって、本論文は、以下の5章で構成される。

序章 本研究の課題と方法

第1章 直江貞夫のライフストーリー

第2章 直江実践における技能教授の教育目的とその構造

第3章 直江実践における技能教授の教育目標の特徴

終章 直江実践における技能教授の教育目標の内容とその意図

3. 直江実践における技能に関する教育目標の内容と教育目的の関連構造

直江実践における技能に関する教育目標の主要な特徴は、作業課題を特定の作業に限定しつつも、その到達基準を生徒たちにとっては難しさを感じ、かつその技能を習得した際には自己の成長を感じられる程の高度な水準に設定していたことにあった。また、その到達基準は段階的に明示されることで、生徒にとっては教師が設定した到達目標を越えてさらに高度な技能習得を展開できる余地を残していた。

直江はこうした高度な水準を持った技能を生徒たちに習得させるために、その動作や姿勢などについて詳細に言語化して教授していた。直江実践における技能の「教授内容」はそうした技能の客観化を主軸としていた。他方で、「技能の客観化」とは異なる「非客観的内容」も教授されていた。技能教授の「非客観的内容」は、力加減やかんなの刃の出具合など、生徒にとってはとらえにくい内容を比喩的、直観的に教授するために重要な役割を果たしていた。

直江は以上のように教育目標を設定し、生徒たちに一定の水準をもった技能を習得させることによって次の教育目的を達成することを意図していた。まず直江は、技能は生徒同士の教え合いや競い合いといった「人間関係」のなかで習得されると考えていた。その「人間関係」の中で生徒たちは教師や友人からの評価や、自己の評価の両面から安定的な自信を形成していき、難しいと思っていたことでもできるようになっていった自分を認識すると同時に、生産労働の世界に対する自己の「可能性」を実感していく。そうした「可能性」を感じさせることによって生産労働への積極的な態度を形成させることを直江は意図していた。また、その労働過程に含まれる課題や苦楽、難しさを、実感をもって把握することによって、生徒たちはその労働やそこに含まれる技能の価値をより豊かに捉える「労働観」を形成できると直江は考えていた。

つまり直江実践においては、技能に関する教育目標を、自己の成長と労働の世界とのつながりを感じられるほどの到達基準に設定することによって、技術および労働の世界への積極的な態度ならびに、技術や労働に対するより豊かな「労働観」を形成するという教育目的を達成させようと意図していたと結論された。

4. 直江実践の技能に関する教育目標論の意義

以上のような直江実践における技能に関する教育目標とその意図との関係は、次の3点において、技術科教育の課題に応えられるものと考えられる。

第1に技術科教育における学力論との関係である。田中喜美は技術学的認識と技能に裏打ちされた技術観・労働観の形成を技術科の教育目的として規定した。しかしその学力論は認識面を中心に検討されていた。本研究はこの田中の学力論に対し、技能習得から労働観の形成へとつながる論理を具体的事例をもって提示できた。

第2に技能に関する教育目標に関する具体的検討という課題に対してである。本研究はこの課題に対し、教育実践という教育の具体をもって検討した。その結果、労働の世界とのつながりを意図して技能の到達基準を高度に設定するという到達目標の特徴や、客観化を主軸としつつも比喩的、直観的に教授する「非客観的内容」も重要な役割を果たす教授内容の特徴を指摘できた。

第3に技能の習熟の問題に対してである。技術科教育ではこれまで、技能の習熟は求めるべきではないと主張されてきた。しかし、本研究は普通教育としての技術教育の教育目的の一つである「労働観」の形成のためには、自己の成長と労働の世界とのつながりを感じられるほどの一定程度の水準をもった技能にまで習熟させることの重要性を提起した。